



子どもを被ばくから守りたい母のドキュメンタリー映画 「小さき声のカノン」上映会にむけて



4月3日(日)エコールみよたでの上映会までもうすぐです。私が、鎌仲監督に初めて会ったのは8年前のこと。「原発止められるかって?止めたいでしよう。みんなで止めよう。」気持ちよいくらいポジティブ!常に周りを笑わせて元気いっぱい!また周りを気遣うあったかい人でした。それは有名になっても全く変わることなく。

鎌仲さんが映画監督になった理由…それはイラクで出会った子ども達でした。当時テレビ局にいて湾岸戦争後のイラクを取材した際、アメリカが使った劣化ウラン弾が放置され、それに被爆してがんや白血病で亡くなっていく子どもたち。薬で命が救えるのに経済封鎖のため手に入らず、なす術もない状況を伝えたいと帰国。その兵器に日本の原発の核のゴミが使われた可能性や、原発の核のゴミの行き場がないこと、原発のリスク、すべて伝えたいと頑張るが、マスコミは原発関連企業が巨大スポンサーで企画が通らず、映画監督になったそうです。「日本では、ドキュメンタリー映画でしか事実を伝えられない」と。

そして、監督が止めたかった原発事故が、福島で現実となってしまいました。私はその時、「被ばく」は過去のもので、イラクの子ども達のことも他人事として受け止めていたことにショックを受けました。4ヶ月の息子を抱きしめながら、放射能の影響が一番受けるのは何の責任もない小さな「いのち」で、責任ある私たち大人ではないことも…。

福島では除染が未だに徹底されず、されても除染ゴミが自宅の庭に埋められたり、近所に野積みだったり、場所によって住宅地や子どもの通学路など線量が高いままだそうです。子を持つ家族にとって辛い状況です。鎌仲さんは子どもを守りたいという思いを今も持ち続けてこの映画につながっています。撮り始めた時の監督のメッセージをのせました。子どもの未来を信じて仲間と頑張っている人たち、その存在を知ってもらいたい。ぜひ見に来てください。

